

実践報告 英語と日常的に触れるために(その3)

—「成美堂 eラーニング」の実施状況の比較・検討—

キーワード：英語の日常化／習慣化／授業外活動

堀内 ちとせ

0. はじめに

英語に対する「学習意欲」の乏しい医療系の学生たちの日常に少しでも「英語の彩り(!)」を添えようと、2012年度より筆者の担当クラスでは「英語活動・実体験レポート(English Activity)」の「試み」を10年以上にわたり継続している。「英語活動・実体験レポート」とは学生たちに日々の「英語活動」を記録させ提出させる課題で、一種の日記や日誌のようなものである(堀内, 2013)。

「英語活動・実体験レポート」とは別に、学部の方針に基づき2022年度より、所属学部の新1年生全員に対して「成美堂」の「eラーニング」(<https://ja.englishcentral.com/browse/videos>)を導入することとなった。この「成美堂 eラーニング」は、形式上、実施する学生の自主性に任されていたが、筆者は「英語活動・実体験レポート」と同じように、「成美堂 eラーニング」を「毎日実施する」よう促した。つまり、この「成美堂 eラーニング」の導入自体が、「学生たちの日常に英語(の彩り)を！」とも言うべき筆者の願いと大きく合致するものとなった。

今回は「英語活動・実体験レポート(English Activity)」は一旦置いて、この「成美堂 eラーニング」の学生たちの日々の「取り組み」状況について、初代の学生たち(医療系 A学部2022年度1学年242名)と、2023年度の1学年(同じくA学部248名、および、B学部280名)の前期クラスでの「取り組み」について考察してみたい。

1. 「成美堂 eラーニング」

1.0 「成美堂 eラーニング」導入に至るまで

2021年度も終盤に差しかけた頃、突然、教務委員長より電話があった。何でも、英語が(少しでも)できる学生たちを育てる「新しい学部方針」を立てたいとのこと。

筆者は勤務校には30年以上在籍しているが、教務委員長より直々のご相談電話があったのは初めてのことであった。驚きを隠せないまま、「英語活動・実体験レポート(English Activity)」の根底に流れる、筆者の基本的な「英語学習に対する考え方」を詳しく伝える機会を得ることとなった。

「特色ある学部づくりの一環として、できたら英語を少しでも話せる学生を育てたい」と、教務委員長。数日間の既成の「eラーニング」検索・検討ののち、「話す活動」が盛り込まれ、かつ値段的にも手頃である「成美堂 eラーニング」を採用する運びとなった。

1.1 「成美堂 eラーニング」について

「成美堂 eラーニング」とは、EnglishCentral 社が提供する、短い「動画」を用いた「eラーニング」システムを大学生用にアレンジしたものである。2022 年度より、新入生に対して実施することとなったのは、EnglishCentral 社が提供する多数の動画のうちの 100 本ほどの「動画」について、「動画視聴」・「単語練習」・「話す・発音練習」の 3 つの活動を実施することができるコースである（医療系動画 100 本は、筆者が選別）。

EnglishCentral 社の提供する「eラーニング」では、上記の 3 つの活動が 100 本と限らず、全ての動画で実施できるのは魅力であるが、その一方で月額のコストが相当かかってくる。それに対して「成美堂 eラーニング」は、動画数も 100 本と限りがあることから、通常の「英語教科書」とほぼ同じ負担額（約 3000 円程度）で、1 年間実施できるのが魅力である。

さらに、教員側にとって、日にちを設定すれば、期間ごとの実施状況をエクセルシート上で確認できることはデジタル版の「English Activity」と同様である（堀内, 2022）。学生の取り組みをデジタル上で確認できることは、学生たちの日々の「動き」を追跡する上で非常に便利である。

1.2 「成美堂 eラーニング」の位置づけ

学生たちは「成美堂 eラーニング」をどのような形で進めていくのか。

「成美堂 eラーニング」上の 100 本の動画は、「動画」の長さ・難易度（EnglishCentral の区分に基づく）に応じて、Unit 1～Unit 13 に区分されている（Unit 区分は、筆者）。

先に述べたとおり（0. 参照）、「英語活動・実体験レポート（English Activity）」と同様に、学生たちは「成美堂 eラーニング」を「日々継続的に実施」していくこととする。「成美堂 eラーニング」の「実施状況」は、「英語」の評価の一環とする。

2. 「今回の調査」について

2.0 対象クラス

「成美堂 eラーニング」を導入し「実施状況」を評価に入れ始めた2022年度、筆者が担当する「英語」のクラスにおいて、初めて多数の「不合格者」が発生してしまった。成績の内訳を確認すると、「成美堂 eラーニング」が原因で「不合格」となっている学生ばかりであった。

とはいえ、「動画視聴」・「単語練習」・「話す・発音練習」の3つの活動が実施でき、値段的にも手が届く「成美堂 eラーニング」には大きな魅力がある。そのため、2023年度からはA学部のみならずB学部においても導入することとした。

今回は、医療系大学、A学部2022年度1学年(前期)242名、同じくA学部2023年度1学年(前期)248名、および、2023年度B学部1学年(前期)280名を対象に検討を行う。

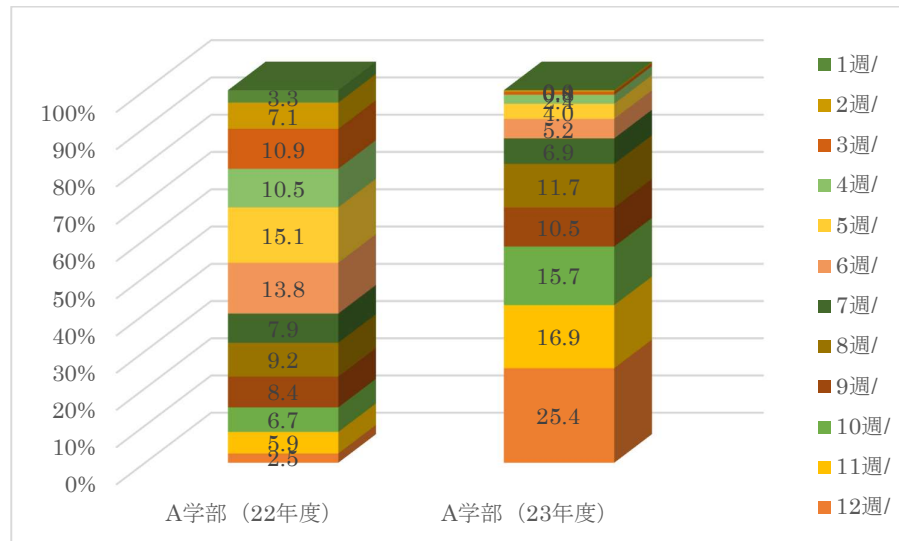
2.1 方法

上記学生に対して最終週(第12週目)における「成美堂 eラーニング」の「実施週数」ごとの学生の割合、および週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合について、比較・検討を行う。

3. 結果と考察

3.0 第12週目における結果についての比較・検討

3.0.1 A学部1年生クラスの比較(2022年度 vs. 2023年度)



Note. A学部、2022年度(左側)と2023年度(右側)の1年生クラス(一部、留年者も含む)における第12週目の「実施週数」ごとの結果。縦軸は、12週のうちの「表示週数」実施が見られた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図1 第12週目における「実施週数」ごとの学生数(割合)の比較
(A学部1年生クラス2022年度 vs. 2023年度)

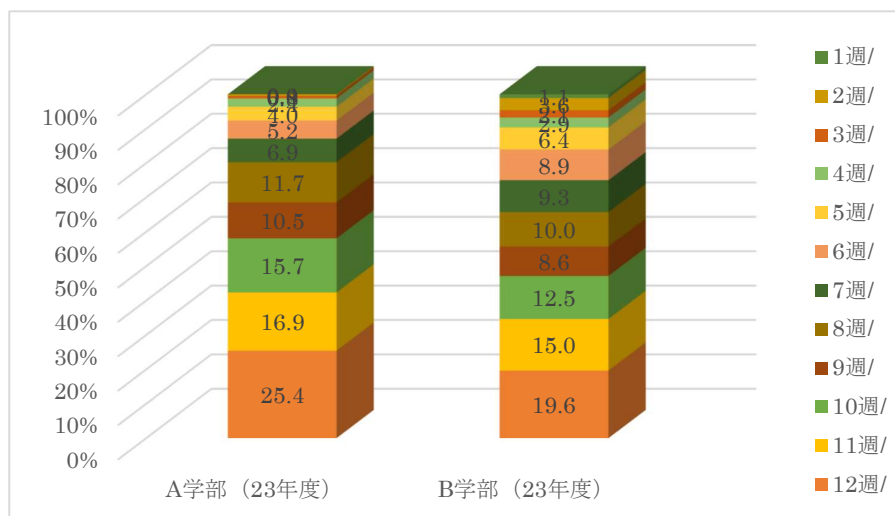
図1は、A学部の2022年度および2023年度の1年生クラスにおける、第12週目の「成美堂eラーニング」の「実施週数」ごとの学生の割合を1つのグラフに示したものである。

12週間全ての週において実施している学生の割合(図1のオレンジ部分)を比較すると、2023年度は、2022年度の10倍も多いことが分かる(25.4%対2.5%)。また、2023年度では10週以上実施している学生の割合(図1のオレンジ・黄・黄緑部分)だけで、過半数を超えていることが分かる(25.4%+16.9%+15.7%=58%)。

一方、2022年度では12週間のうち3週以下しか実施していない学生の割合(図1の濃いオレンジ・黄土・濃い黄緑部分)が、20%以上に達している(10.9%+7.1%+3.3%=21.3%)。さらに、12週間のうち5週以下しか実施していない学生(図1の黄・薄黄緑・濃いオレンジ・黄土・濃い黄緑部分)だけで、ほぼ半数に達している(15.1%+10.5%+10.9%+7.1%+3.3%=46.9%)。

A学部における2022年度と2023年度の1年生クラスに対する第12週目の「成美堂eラーニング」の「実施週数」ごとの学生数の平均値の差を優位水準1%の両側検定により検討したところ、有意差が見られた($t(488) = 14.45, p < .01$)。

3.0.2 2023年度1年生クラスの比較(A学部 vs. B学部)



Note. 2023年度A学部(左側)とB学部(右側)の1年生クラスにおける第12週目の「実施週数」ごとの結果。縦軸は、12週のうちで「表示週数」実施が見られた学生の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図2 第12週目における「実施週数」ごとの学生数(割合)の比較
(2023年度1年生クラスA学部 vs. B学部)

図2は、2023年度、A学部とB学部の1年生クラスにおける第12週目の「成美堂 eラーニング」の「実施週数」ごとの学生の割合を1つのグラフに示したものである。

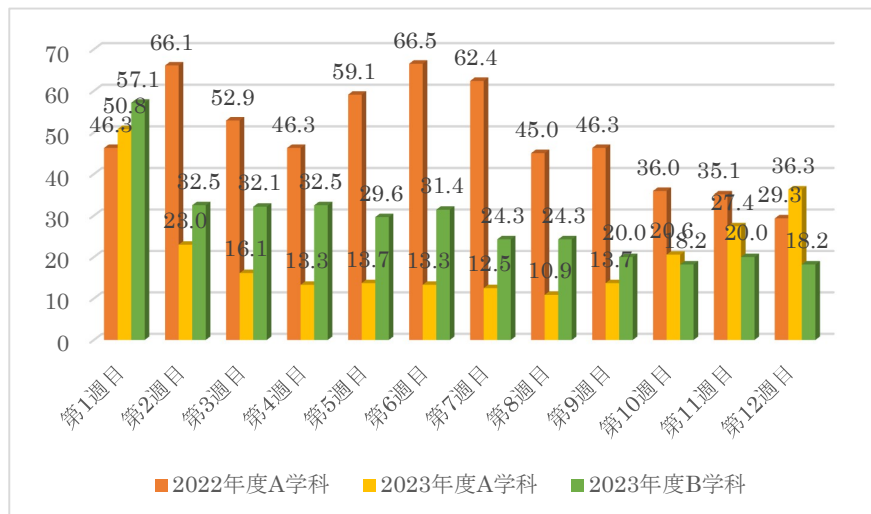
12週間のうち毎週実施している学生の割合(図1のオレンジ部分)を比較すると、A学部の方がB学部よりも約5%多い(25.4% > 19.6%)。また、10週以上実施している学生の割合(図1のオレンジ・黄・黄緑部分)に関してもA学部の方が約10%多いことが分かる(25.4% + 16.9% + 15.7% = 58% > 19.4% + 15.0% + 12.5% = 46.9%)。

8週までの区分ごとの学生の割合(図1のオレンジ・黄・黄緑・茶色・濃い黄土部分)を比較すると、やはりA学部の方がB学部よりも少し多いようである(25.4% > 19.6%, 16.9% > 15%, 15.7% > 12.5%, 10.5% > 8.6%, 11.7% > 10.0%)。

2023年度におけるA学部とB学部の1年生クラスに対する第12週目の「成美堂 eラーニング」の「実施週数」ごとの学生数の平均値の差を優位水準1%の両側検定により検討したところ、有意差が見られた($t(526) = 3.83, p < .01$)。

3.1 「実施皆無(0%実施)学生」についての比較・検討

3.1.0 週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷



Note. 2022年度A学部(左端:オレンジ)と2023年度A学部(真ん中:黄)・B学部(右端:黄緑)の1年生クラスにおける週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合(変遷)。縦軸は、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図3 週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷
(2022年度A学部 vs. 2023年度A学部 vs. B学部)

図3は、2022年度A学部1年生クラス(オレンジ)および2023年度A学部(黄)・B学部(黄緑)の1年生クラスにおける週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合の変遷を1つのグラフに示したものである。図3の前半(1週目～6週目)の結果によれば、「実施皆無(0%実施)学生」は2023年度の1年生クラスA学部(黄)・B学部(黄緑)ともに減少傾向にあるのに対し、2022年度(オレンジ)では5週目と6週目に増加傾向が見られる。

一方、図3の後半(7週目～12週目)においては、2022年度A学部(オレンジ)と2023年度B学部(黄緑)の「実施皆無(0%実施)学生」が概ね減少傾向をたどっている中で、2023年度A学部(黄)のみ増加傾向が見られる。

これは、2023年度A学部(黄)の学生たちは、第10週目と第11週目の期間に「試験期間(2週間)」を挟んでおり(2023年度A学部は、「eラーニング」の開始時期が2022年度、および、2023年度B学部よりも2か月ほど遅れたことに因る)、第10週目からの「実施皆無(0%実施)学生」の増加はそのためだと考えられる。

前期の途中段階であり試験期間でもない2022年度A学部(オレンジ)の第5週目と第6週目には何が起こったのか。また、2023年度のA学部(黄)とB学部(黄緑)を比べると、「実施皆無(0%

実施)学生」の割合がA学部の方が少ないのは何故か。

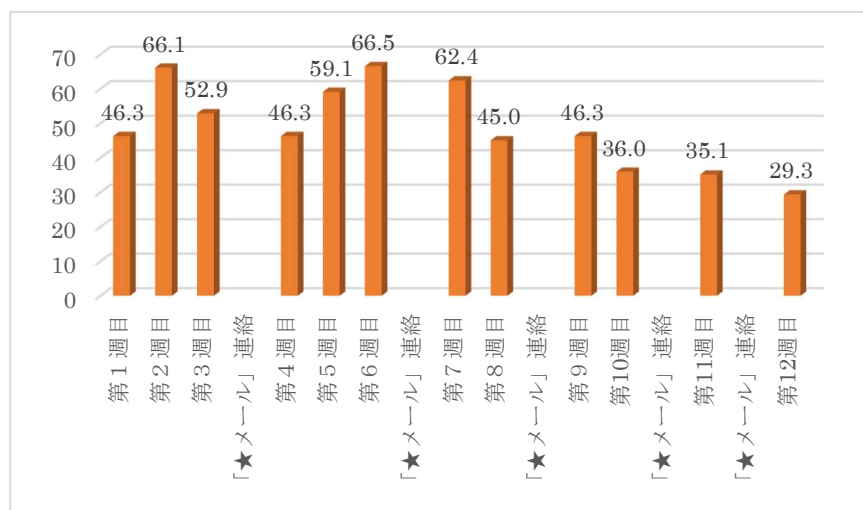
2022年度と2023年度の「成美堂 eラーニング」実施に関する学生への促しは、「件名」に「★」が付されている「連絡メール(以下「★メール」とする)」のみで行った。これは、筆者が「成美堂 eラーニング」実施クラスを同時期に担当することができないため、クラス間での不平等を解消するための苦肉の策であった。

「実施皆無(0%実施)学生」の割合の増減に影響を及ぼす要因として考えられる他の要因としては、上記の「試験期間」もさることながら、学生への「★メール」連絡の影響も考えられる。

筆者の記憶では、2022年度と2023年度のいずれも、学生たちに対して「★メール」連絡を同様に入れたつもりだった。ただし、2023年度A学部に関しては、ある時点で「★メール」を確認するよう、クラス全体に対してクラス委員を通じて「LINE 連絡」を送ることがあった。これは、大学生の多くが通常のメールよりも仲間からの「LINE 連絡」を優先的に確認する傾向があるのではないかという観点からの、ひらめきの依頼であった。

そこで、次に教員(筆者)からの学生への「リマインダー(★メール)」と、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」について、年度ごとに分けて詳しく見ていくことにする。

3.1.1 2022年度A学部1年生クラスにおける「実施皆無(0%実施)学生」の変遷



Note. 2022年度A学部1年生クラスにおける学生への「リマインダー(★メール)」の「送信時期」と、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の結果。縦軸は、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図4 学生への「リマインダー(★メール)」の「送信時期」と週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷(2022年度A学部)

図4は、2022年度A学部1年生クラスにおける「成美堂 eラーニング」実施を促す「リマインダー(★メール)」の「送信時期」を時間系列で表示し、それに合わせて週ごとの「実施皆無(0%実施)

学生」の割合の変遷を示したものである。

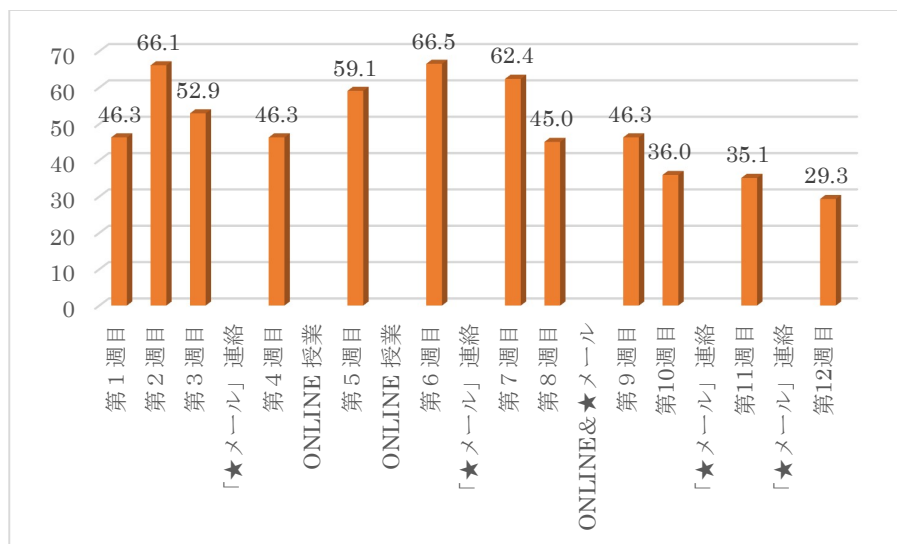
図4を見て驚いた。筆者としては2022年度においても毎週リマインダーを入れていたつもりであった(2023年度は、A・B学部とも毎週リマインダーを入れている)。ところが、2022年度においては、開始直後は3週間ごと、後半(第7週目～第12週目)に入ってリマインダーの回数が増えていき、第10週目以降に初めて毎週「リマインダー(★メール)」が入る状況となっていたのだ。

「リマインダー(★メール)」の「送信」と「実施皆無(0%実施)学生」との関係を詳しく見てみると、第8週目と第9週目の間を除いて、全ての「リマインダー(★メール)」が効力を発揮していることが分かる(第2週目(52.9%)>第3週目(46.3%)、第6週目(66.5%)>第7週目(62.4%)、第10週目(36.0%)>第11週目(35.1%)、第11週目(35.1%)>第12週目(29.3%)。

第8週目と第9週目の間は「リマインダー(★メール)」を送信しているにもかかわらず、「実施皆無(0%実施)学生」の増加が見られる(第8週目(45.0%)<第9週目(46.3%)。

第8週目と第9週目の間に何が起こったのか。そこで、2022年度の時間割を確認してみることにする。その結果、ちょうど第8週目と第9週目の間の「英語」の授業がONLINEでの実施となっていたことが判明した。2022年度A学部1年は大方の授業が「対面」で行われていたが、諸事情により3か所のみONLINEとなっていた。

そこで、「ONLINE 授業」の情報を付け加えることとする。



Note. 2022年度A学部1年生クラスにおける学生への「リマインダー(★メール)」の「送信時期」および「ONLINE 授業」の「実施時期」と、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の結果。縦軸は、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図5 学生への「リマインダー」の「送信時期」および「ONLINE 授業」の「送信時期」と週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷(2022年度A学部)

図5は、2022年度A学部1年生クラスにおける「成美堂 eラーニング」実施を促す「リマインダー

(★メール)」の「送信時期」および「ONLINE 授業」の「実施時期」を時間系列で表示し、それに伴う週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合の変遷を示したものである。

図5に示されるように、第8週目と第9週目の間以外に、第4週目と第5週目および第5週目と第6週目の間にもONLINEで授業が実施されている。しかも、興味深いことには、この「ONLINE 授業」を挟んだ後の「実施皆無(0%実施)学生」の割合に増加が見られるのだ(第4週目(46.3%)<第5週目(59.1%)、第5週目(59.1%)<第6週目(66.5%)、第8週目(45.0%)<第9週目(46.3%))。

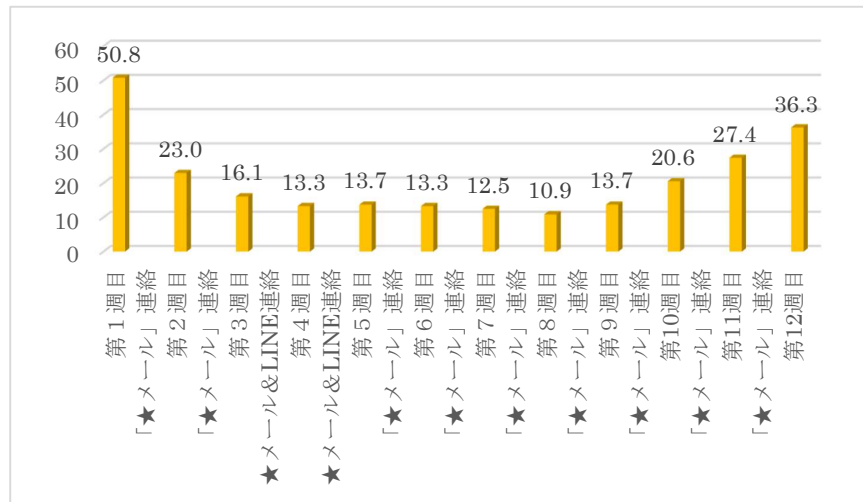
第8週目と第9週目の「実施皆無(0%実施)学生」の割合の増加が第4週目～第6週目よりも少ないのは、「リマインダー(★メール)」が多少なりとも効力(!?)を発揮しているからなのかもしれない。

なお、第1週目の「実施皆無(0%実施)学生」の割合が第2週目よりも低いのは、第1週目に「成美堂 eラーニング」の「ONLINE 説明会」を実施したためだと考えられる(その説明会は、多くの学生たちにとって初めて実際に「成美堂 eラーニング」に触れる機会となった)。また、第2週目辺りは、ゴールデン・ウィークに差しかかったことも関係している可能性も考えられる。

3.1.2 2023年度 A・B学部 1年生クラスにおける「実施皆無(0%実施)学生」の変遷

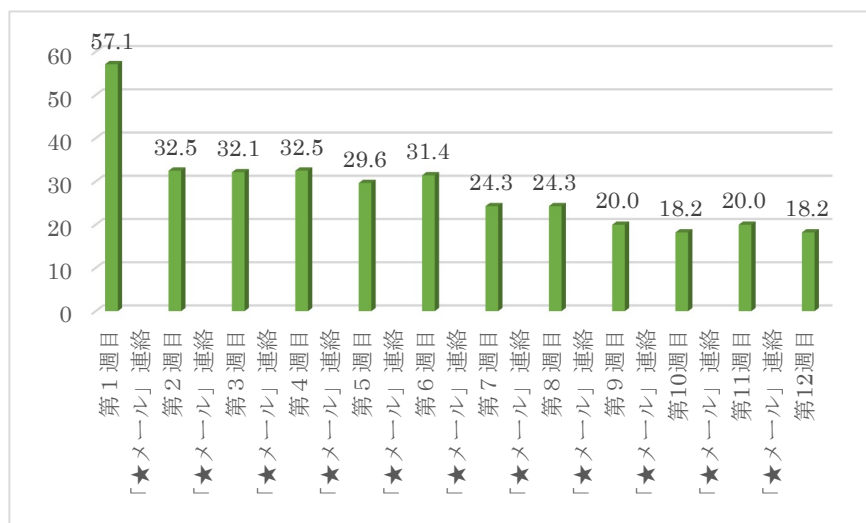
2023年度 1年生クラスについては、3.1.0でも述べたように、2023年度 A学部に対してはある時点でクラス委員に「LINE 連絡」を頼んだことがあった(「eラーニング」開始がいつまでも見られない学生への連絡のため)。A学部については、「LINE 連絡」の内容も含んだ変遷を次に示す。

なお、B学部でも「eラーニング」の実施がなかなか始まらない学生は何人か見られたが、4月の時点から呼びかけていたこともあり、「LINE 連絡」を思いつく前に数人の退学予定者以外は概ね全員開始することができた。



Note. 2023年度A学部1年生クラスにおける学生への「リマインダー(★メール)」および「LINE 連絡」の「送信時期」と、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の結果。縦軸は、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図6 学生への「リマインダー(★メール)」および「LINE 連絡」の「送信時期」と週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷(2023年度A学部)



Note. 2023年度B学部1年生クラスにおける学生への「リマインダー(★メール)」の「送信時期」と、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の結果。縦軸は、週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示す(縦軸:パーセント)。

図7 学生への「リマインダー(★メール)」の「送信時期」と週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の変遷(2023年度B学部)

図6は、2023年度A学部1年生クラスにおける「成美堂 eラーニング」実施を促す「リマインダー(★メール)」および「LINE 連絡」の「送信時期」を時間系列で表示し、それに合わせて週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示したものである。また、図7は、2023年度B学部1年生クラスにおける「成美堂 eラーニング」実施を促す「リマインダー(★メール)」の「送信時期」を時間系列で表示し、それに合わせて週ごとの「実施皆無(0%実施)学生」の割合を示したものである。

図6における第7週目からの後半で「実施皆無(0%実施)学生」の割合が増加しているのは、上述のとおり(3.1.2 参照)、第11週目と第12週目に「試験期間」があるためである。第10週目からの3週を除いて全ての週でA学部の方がB学部よりも「実施皆無(0%実施)学生」の割合が低いことが分かる(第1週目より順に、50.8% < 57.1%、23.0% < 32.5%、16.1% < 32.1%、13.3% < 32.5%、13.7% < 29.6%、13.3% < 31.4%、12.5% < 24.3%、10.9% < 24.3%、13.7% < 20.0%)。

初めはA学部にのみ行った「LINE 連絡」のためかと考えたが、「LINE 連絡」を行ったのは第3週目～第5週目の間の2回のみである。しかも、A学部の「実施皆無(0%実施)学生」の割合は「LINE 連絡」を実施する以前から低い値を保っている。

原因の1つには学生の人数が考えられる。A学部よりもB学部の方が30人ほど多い。今回に限っては、A学部の方が2か月ほど「eラーニング」の開始時期が遅れてしまったことの影響も大きいかもしれない。A学部においても入学時より「eラーニング」の予告はしており、開始時期が遅くなったことが却って良い結果をもたらした可能性もある。A学部での開始は前期もほぼ半ばを過ぎようとした頃であったため、多くの学生が必死で取り組もうとしていた可能性も考えられる。

「eラーニング」実施の促しこそ授業の中で行わなかったが、筆者自身が「対面」で授業を行う機会があるかないかといったことも、意外に影響を及ぼしている可能性がないとは言えないかもしれない(A学部で筆者の「対面」授業を経験していない学生は全体のおよそ半分の120人ほどであるのに対し、B学部では過半数を超える(約60%)160人にまで上る)。

実際に「対面」で伝えるかどうかは別にしても、密かに「対面」の力(!)が働いている可能性もあるのかもしれない。

4. おわりに

前回の試みでは、学生たちの日々の実施課題とも言える「English Activity」の実施状況についての考察を行った。結果として、「英語」とは全く無縁の「体温入力」の日々の指導が「English Activity」の取り組み状況に大きく影響を及ぼすことがあることが分かった(堀内, 2022)。

今回は、2022年度より実施を始めた「成美堂 eラーニング」の実施状況について2022年度クラスと2023年度クラスの実施状況を比較して検討してみた。その結果、前回の「体温入力」指導ではないが、日々の「リマインダー(★メール)」の学生たちの実施状況への影響が大きいことが分かった。リマインダーが少なかった2022年度の学生よりも、毎週リマインダーがあった2023年度の学生の取り組み状況の方が良いものであった(3.1 参照)。

今回、偶然にも分かったこととしては、学生たちが毎日お互いに顔を合わせることのできる「対面」授業は(やはり!)プラスの影響を及ぼしているかもしれないということである。2022年度実施された「ONLINE 授業」後の「成美堂 eラーニング」の「実施皆無(0%実施)学生」の割合では(意外にも!)増加が見られたのである(3.1.1 参照)。

英語が嫌いな学生が多い場合、「対面」授業ではマイナスのオーラが授業全体に負の影響を及ぼすのを筆者は兼ねてからできれば避けたく感じて来た。2020年のコロナ禍での「ONLINE 授業」以来、ずっと「ONLINE 授業」が続くことすら願っていた気持ちは否めない。ただ、学生の立場に立てば、マイナスであろうとプラスであろうとお互いに顔を突き合わせて影響し合っていることが本当に幸せなことであるのかもしれない。

一方で、「リマインダー(★メール)」に頼らず、クラスの仲間にも頼らず、自律的に英語学習を続けていけるような強靱な「習慣力」を英語の授業を通して身に着けていってくれることを強く願わざるを得ない。

今後も、日々の学生たちの「つぶやき」や小さな行動の変化にも意識を向けながら、学生たちと共に「英語の授業」および「英語学習」の向かうべき方向を模索しながら、共に日々精進していけたらと思う。

謝辞

2022年度、「成美堂 eラーニング」新入生実施に至る過程で、一英語教員である筆者に思いがけずお声がけくださった、藤田医科大学、医療科学部の日比谷信教授、および、「成美堂 eラーニング」を進めるに当たって、きめ細やかにご対応くださった株式会社成美堂 e-L 担当でいらっしゃる佐藤恵子様に心より感謝を申し上げたい。

参考文献

- 堀内ちとせ(2013)「英語の日常化を図るために—『英語活動・実体験レポート』の試みについて—」 *Language & Literature* (Japan) 第 22 号 82-94. 愛知淑徳大学大学院英文学会.
- 堀内ちとせ(2022)「英語の日常化を図るために(その2)—「体温入力」指導による効果について—」 *Language & Literature* (Japan) 第 31 号 33-42. 愛知淑徳大学大学院英文学会.